



旭川地区ミニバスケットボール連盟創立 30 周年記念  
第 43 回旭川地区ミニバスケットボール選手権大会総評

夏の大会に比べると、どのチームも本大会に照準を合わせて練習を積み重ね、仕上げてきたと感じました。

今大会は、6年生にとっては最後の大会ということもあって、どのゲームもその気迫が伝わるファイトあるプレーや諦めないプレーが随所で光り、一回戦から僅差のゲームもたくさん見られました。

そのような中、ゲームにおいては、インサイドを起点に展開するチーム、ブレイクを主体にトランジッションを上げ攻撃するチーム、ナンバープレーで確実にゴールを決めてくるチーム、スクリーンを使ってチャンスを生み出すチーム等、各チームの構成メンバーの特色を生かしたプレーが随所に見られました。全体的にチーム力が上がったと感じました。また、このような様々な戦術を駆使してプレーを展開させることにより、そのプレーを通して、ゲームに必要な個々のスキルの向上も見られました。

しかしながら、最終的に勝敗を決めるのは、粘り強いプレーとシュート決定率であると感じました。

シュート決定率を上げるためには、シュートセレクションの良さが重要であると考えます。人が動き、ボールが動く。そしてディフェンスが動くことでスペースが生まれます。いかに 1 対 0 の状況を作るかが重要になってきます。今大会では、このスペースを生かしたオフェンスが上手にできているチームが勝負をものにしていたと感じました。今後も、いかにノーマークを作り出し得点に繋げるのかを各チームで構築し、質の高いプレーが展開されることを期待しています。

オフェンスにおいてもディフェンスにおいても 1 対 1 ではインラインを意識したプレーが必要であると感じました。リングに対して縦に切り込むドライブが鍵となっていたと思います。オフェンスはパッシングプレーの中にも、常に 1 対 1 の意識を持ちリングに向かうという姿勢を大切にしていけると良いと考えます。

今大会では、スペースのないところへのドライブが目立ちました。1 対 1 を破り 2 人目のディフェンスをステップでかわしたり、フローターシュートを撃ったりして高い技術を駆使して得点できる選手もいましたが、多くの場合、プレーに参加するオフェンスが少なく 1 対 5 のような状況になっているときにドライブに行くことがみうけられました。結果として、待ち構えているところに無理に攻め込み、それがミスにつながっていました。1 対 1 を仕掛ける意識は大切ですが、これは、状況に応じたプレーを選択できていないとも言えます。

先にも述べましたが、オフェンスの意識としては、フロアバランスやパッシングを意識して 5 人でのプレーが連続するような展開をすることが望ましいと思います。そのために、ムービングレシーブやリードパス、レシーブ前のビジョンの確保、ストップしてからのボール移動などの技術がしっかりと身につけているかを確認すると良いと思います。

また、マンツーマン推進の観点からも課題が見られました。1 対 1 の能力の向上を目指すのであれば、マンツーマンの規定に沿ったディフェンスの指導も必要であるが、オフェンスの意識も変えていく必要があると考えます。各チームの事情でメンバー構成的に仕方がない部分も理解はできますが、オフェンスでボールを触ることがない選手がいたり、固定した場所にいるだけの選手がいたりすることが見受けられました。そのことによってディフェンスが正しくできないという状況も見られました。これは、規定について目的をもう一度考え、運用していく必要があると思います。また、ディフェンスにおいては、特にボールマンに対するディフェンスがドライブを警戒しルーズになりがちでした。まずはシュートを簡単に撃たせないことを意識づけし、ボールマンに対してはタイトにディフェンスするよう指導していく必要があると考えます。ディフェンスがタイトになることで、オフェンス力の向上も期待できるからです。

以上、今大会で見られた成果と課題ですが、今後の各チーム作りの視点の一つとして考えていただければと思います。また、大会を勝ち上がり全道大会に出場するチームにおいては、チームの課題を明確にし、それを克服しつつもチームのよさを伸ばし、さらにレベルアップをしてベストな状態で全道大会に臨み活躍することを期待しています。